日本歯科医史学会々誌・第27巻
第3号通巻104号・平成20年4月

「耳嚢」にみられる歯痛の治療法について*1

鶴見大学歯学部　佐藤恭道　戸出一郎　雨宮義弘*2

要旨：江戸時代，庶民文芸が発達すると，民間の識字率は高くなり，読書欲も旺盛になってきた．一方医療については，医師の治療を受けることが出来なかった庶民は，様々な民間療法で対処してきた．今回我々は江戸時代中期，佐渡奉行や江戸町奉行などの要職を歴任した根岸鎮衛の著した随筆『耳嚢』にみられる口腔疾患治療について検索した．『耳嚢』には著者が見聞した当時の風俗や奇談などと共に民間療法が記されている．その記述は内科疾患から皮膚病，眼病，精神疾患など多岐にわたっている．口腔疾患の治療については，呪いの類も含めて7種類の治療法が記載されている．これらの記述は著者が，満足に医療を受けられない困窮した庶民を見て，多くの治療法を記したのではないかと考えられた．また，本書は江戸時代における庶民の歯科医療状況を知る上で貴重な一文献であると考えられた．

キーワーズ：耳嚢，根岸鎮衛，民間療法，口腔疾患

Summary：With the increase in literacy and the desire to read during the Edo Period, popular art and literature developed. At the same time, the people who lacked access to medical treatment resorted to folk remedies to deal with their diseases. We researched how oral diseases were treated as described by Yasumori Negishi in his mid-Edo work, "Mimibukuro". Negishi held such important positions within the Edo Shogunate as Sado Magistrate and Edo Magistrate successively. "Mimibukuro" records a number of folk remedies as well as folk customs and ghost stories. Seven kinds of treatments for oral disease are found. There treatments reflect the poverty of people who had no access to proper medicine.

Key words：Mimibukuro, Yasumori Negishi, Folk remedy, Oral diseases

はじめに

江戸時代，仮名草子や滑稽本など庶民文芸が発達すると，民間の識字率は高くなり，読書欲も旺盛になってきた．一方医療については，医師の治療を簡単に受けることが出来ない庶民は様々な疾患に対していわゆる民間療法で対処してきた．

そこで今回江戸時代中期，根岸鎮衛の著した随筆「耳嚢」に見られる口腔疾患治療について検索したので報告する．

根岸鎮衛と「耳嚢」について[1)]

根岸鎮衛（銕蔵，九郎左衛門，守臣：元文二年1737～文化十二年1815）は幕臣として佐渡奉行（天明四年1784），勘定奉行（同七年1787），江戸町奉行（寛政十年1798）などを歴任，従五位下肥

*1 Oral Treatment in "Mimibukuro"

*2 Tsurumi University, School of Dental Medicine
Yasumichi SATO, Ichiro TODE and Yoshihiro AMEMIYA

なお，本論文の要旨の一部は平成15年10月18日第31回本学会学術大会において発表した．

前守にも叙任されている．その間，特に天明の浅間山噴火災害による田畑や河川の普請に功績をたてている．

根岸鎮衛が「耳嚢」の著述に着手したのは佐渡奉行の頃で最終巻は文化十一年（1814）六月の筆と云われている．内容は著者が見聞した，当時の風俗や奇聞，怪談などとともに内科的疾患から皮膚病，眼病，精神疾患など幅広い範囲の民間療法が記載されている．

口腔疾患の治療について[2)]

口腔疾患については，呪いの類も含め巻二，四，五，七にそれぞれ1法，巻八に3法，合計7種類の療法が記載されている．

1．蟲歯痛を去る奇法の事（巻二）

『韮の実を火に焚て，右煙を以て痛候所を管などにて通し，いぶし候へば即効有りと人の語りしに，また或る人のいへるは，筆（瓦）を焼て半盥やうの物へ入，韮の実を亀湯をかけ候へば煙立ち候を，右煙にて耳を蒸し候へば，耳より白き物出候．右白き物は蟲歯の蟲也といへるが，まのあたり様し見しと人の語りける．』

同様な方法としては，宝暦十年（1760）に刊行された「薬屋虚言噺」[3)]に韮の根を焼いた煙を耳から喉へいきわたらせる方法が記載されている．また天明から享和（1780～1800頃）にかけて熊本藩の医師が著した「和方一万方」[4)]，幕末から明治に刊行された「奇工方法」[5)]などにも類似の方法が記されている．

文学的にも「耳嚢」と同時代に曲亭馬琴が著した「燕石雑志」[6)]には『…又韮子を熏して歯の虫をとる方あり．….』との記述があったり，津村正恭（淙庵）の随筆「譚海」[7)]（安永五年1776～寛政七年1795）には，蟲ばを治する法として『…にらの煙を耳の内へ….』との記述がある．この時代，江戸の庶民に広く流布していたものと考えられる．大正時代，日本各地に伝わる薬草の効能について記されている「民間薬用植物誌」[8)]にもニラ，ニンニクを用いた同様な方法が記されている．また口中の痛みに対して薬草を燻蒸してその煙を用いる方法は，古くはギリシャ・ローマ時代から，ハッカやヒヨスなどを用いて行われてきた[9)]．洋の東西を問わず同様な方法が行われてきたこと，近代まで伝承されてきたことは興味深い．

2．歯の妙薬の事（巻四）

『是も柳生氏かたりけるは，同人の歯性至てあしく，壮年の比，口医も四十迄は此歯の無難ならざらん事を示しけるが，或人の教にて，冬瓜を糠みそに漬にし干上げ，黒焼きにして日々一度宛ふくみしが五十に成て未歯の愁ひなし．しかし一両年又々震るぎ杯する事ありしに，又人の教けるは，右冬瓜の黒焼，胡栗の渋皮共黒焼になしたるを合せ，又チサの茎にたちたる軸を黒焼になし，三味合せて用ゆれば奇妙の由聞て，苣の茎は時即後れて才覚なかりし故，冬瓜胡桃両種を去年巳来用ゆるに，聯か快き事覚へしとかたりぬ．』

冬瓜やチサは，漢方では清熱作用があるとともに排膿や浮腫などに用いられてきた．

植物やその果樹を黒焼きにして薬として用いる方法は枚挙に遑がない．黒焼きが薬用として利用されるようになったのは慶長十一年（1606）「本草綱目」が日本に紹介されてからといわれ，貝原益軒の「大和本草」（宝永五年1708）以後，民間治療薬として普及したと考えられている[10)]．

歯病についても同様で特にナスの黒焼きは多く伝承されている．前述の「薬屋虚言噺」[3)]「和方一萬方」[4)]，天保四年（1833）に刊行された「救急方」[11)]などにも記載されている．またチサは，文政元年（1818）に刊行された「掌中妙薬奇方」[12)]に「歯牙動揺スルモノヲ治スル方」としてチサの実の記載がある．文化十四年（1817）刊行の「懐中備急諸国古伝秘方」[13)]には昆布などとともに川チサの黒焼きについての記載がある．特に前述の「民間薬用植物誌」[8)]にはチサを歯の動揺，痛みに用いるとの記載がある．

3．歯牙の奇薬の事（巻五）

『歯の動き又は歯ぐきはれてなやむ時，南天を黒焼にしてつければ快験を得る由人のかたりし故，予が同僚の人其通りになせしに，快く不動事神の如しと語りぬ．』

「薬屋虚言噺」[3)]には南天の葉をそのまま咬むと痛みに効くとある．また兵庫や福岡，愛知県などには南天の箸や楊枝を用いると歯痛や虫歯にならないとの伝承がある[14)]．これらは南天の果実に含まれる，知覚神経を麻痺させるドメスチンによるものではないかと考えられる．

前述の「歯の妙薬の事」の項と同様に歯周疾患に対してこれらの方法が流布していたのであろ

う.

4．歯の痛口中くづれたる奇法の事（巻七）

『柘榴の皮を水に付てせんじ□，さてあま皮を取て痛所に入置ば，治する事たんてき也．即効の妙法の由，薬店へ取に遣す．干たる柘榴有，又下料なる物の由．横田退翁物語り也.』

歯痛にはザクロの果皮をよく咬むと間もなく痛みがとれるとの伝承が北陸や近畿にある[14]．なお，この横田退翁（袋翁）は萩原宗固に師事した塙保己一と同門の歌人で「耳嚢」には他に養生法などの記述がある．

5．口中痛呪法の事（巻八）

『口中痛候ば，何によらず漱候節右うがひの水を左の手にうけ握りて，肥後の國三の君と三篇唱へ，又念仏にても題目にても三五篇唱ふれば，即時に快験ありと，或る角力取りの，町の与力新五郎へ咄しけるを，埒なき事と思ひながら，新五郎歯痛み苦しみし時，かく唱へぬれば，忘るゝ如くなりしと，長僕どもへ申ける由ゆゑしるし置.』

歯痛の呪文や呪符も枚挙に遑がない．肥後の国云々については，岐阜県に同様な文句が認められる[15,16]．この力士は岐阜県出身だったのだろうか．しかし効果の程は如何であったろう．

6．口中妙薬の事（巻八）

『昆布を煎じて口中を洗，西瓜の上の皮を黒焼にして附れば奇々妙々に治す．舌疽を愁し人に施せしに立所に治せしと，官位長島某密に伝之.』

昆布はヨードの原料としても利用されている．「救急方」[11]には昆布の黒焼きをナスの黒焼きとともに，歯痛や歯周病に効果があるとしている．前述のように「懐中備急諸国古伝秘方」[13]には川チサなどと黒焼きにして舌病舌疽の痛みに用いている．西瓜は冬瓜と同様ナスの変法であろう．「民間薬用植物誌」[8]には小児の口舌の瘡に西瓜の黒焼きや果汁を付けるとよいとの記述がある．

7．歯痛奇薬一法の事（巻八）

『生石灰四匁　天瓜粉二匁　龍脳五分　何も細末にし，その痛所に付るに，奇又妙の由．咽喉に入て不苦由．或人の秘伝なり.』

所謂処方箋のような記述はこの項だけであるが，同様の処方は千金方，万病回春など中国の医書，医心方，頓医抄，万安方などの日本の医書にも見当たらない．

石膏は，その清熱，消炎作用から知母，麦門冬などと配合し歯周病や口内炎などに用いられる（玉女煎）[17]．天瓜粉は，カロコンの粉で抗潰瘍作用やインターフェロン誘起作用がある．龍脳は，古くから頭痛，歯痛などの薬として知られている．これらの配合薬であるから，あながち効果の無い荒唐無稽な処方とは断ぜられないであろう．

「耳嚢」中には，浅田宗伯が著した「勿語薬室方函口訣」の十棗湯の項にも名前の見られる前田長庵[18]をはじめ小児科の木村元長，外科の西良中，阿部春沢，脇坂家医師の秋山玄瑞などの名前が散見できる．その医療に関する記述はこれらの医師からの見聞も含まれるものと考えられる．

特に「大木口哲大坂屋平六五十嵐狐膏薬江戸店最初の事」の項に播磨出身の口中医，大木口哲が著者のもとにも来たとの記述がある．また前述の「譚海」[7]には，この薬屋，大坂屋平六の名前も見られ，江戸に広く知られていたものと推察される．彼らが著者に口腔領域の話をした事も考えられる．

いずれにせよ民間療法は，迷信や神秘的なものが多く，今日の医学から見れば荒唐無稽なものが多い．しかし満足な医療を受けられなかった庶民はこれらの療法を信奉せざるをえなかったのであろう．

著者の根岸鎮衛が跋文に「…人の為に成るべき事を校合して….」と記している．著者は天明の大噴火と云われる浅間山の噴火災害によって荒廃した状況を具に見た．またその後も佐渡奉行として赴任し，過酷な状況下で働く鉱夫たちを見たのであろう．これらの人々を含む満足に医療を受けられない困窮した庶民を見て，これらの治療法を記したのであろう．

ま と め

江戸中期の随筆「耳嚢」に見られる口腔疾患の治療法について検討した．

治療内容は稚拙で荒唐無稽なものもあるが，当時の一般庶民に信奉され，民間療法として広く流布されていたものと考えられた．

よって本書は江戸時代における庶民の（歯科）医療状況を知る上で貴重な１文献と考えられた．

文　献

1) 根岸鎮衛　著・鈴木棠三　編：耳嚢 1，平凡社，東京，2000 年 5 月，493-526
2) 谷川健一　編：日本庶民生活史料集成　第 16 巻　奇談・紀聞，三一書房，東京，1970 年 10 月，279-626
3) 浅見　恵，安田　健　訳編：近世歴史資料集成　第Ⅱ期第 11 巻　民間治療 (4)　薬屋虚言噺，科学書院，東京，1995 年 12 月，235-452
4) 浅見　恵，安田　健　訳編：近世歴史資料集成　第Ⅲ期第 5 巻　民間治療 (9)　和方一萬方，科学書院，東京，1999 年 5 月，1-965
5) 浅見　恵，安田　健　訳編：近世歴史資料集成　第Ⅲ期第 1 巻　民間治療 (5)　奇工方法，科学書院，東京，1999 年 1 月，1-375
6) 曲亭馬琴　著・日本随筆大成編輯部　編：日本随筆大成　第二期 19　燕石雑誌，吉川弘文館，東京，1975 年 2 月，476-478
7) 津村正恭　著・早川純三郎　編：譚海，国書刊行会，東京，1917 年 6 月，481-517
8) 梅村甚太郎　編：民間薬用植物誌，科学書院，東京，1989 年 1 月
9) Waiter Hoffmann-Axthelm　著・本間邦則　訳：歯科の歴史　第 5 章ギリシャ・ローマの医学，クインテッセンス，東京，1985 年 7 月，64-88
10) 鈴木　昶　著：伝承薬の事典，東京堂出版，東京，1999 年 2 月，15-20
11) 浅見　恵，安田　健　訳編：近世歴史資料集成　第Ⅱ期第 11 巻　民間治療 (4)　救急方，科学書院，東京，1995 年 12 月，1-93
12) 浅見　恵，安田　健　訳編：近世歴史資料集成　第Ⅱ期第 10 巻　民間治療 (3)　掌中妙薬奇方，科学書院，東京，1996 年 4 月，901-1038
13) 浅見　恵，安田　健　訳編：近世歴史資料集成　第Ⅱ期第 11 巻　民間治療 (4)　懐中備急諸国古伝秘方，科学書院，東京，1995 年 12 月，177-233
14) 鈴木棠三　著：日本俗信辞典　南天 (2) 民間療法とまじない，角川書店，東京，1982 年 11 月，417-419
15) 小林富次郎　編：よはひ草　第五輯（昭和 5 年復刻），思文閣，京都，1971 年 9 月，43-50
16) 南　博　編：近代庶民生活誌　第 19 巻　呪い・まじない・民間療法，三一書房，東京，1992 年 12 月，269-430
17) 鈴木　洋　著：漢方のくすり事典—生薬・ハーブ・民間薬—，医歯薬出版，東京，1994 年 12 月，234-235
18) 大塚敬節・矢数道明　編：近世漢方医学書集成 96　浅田宗伯（二），名著出版，東京，1982 年 11 月，249-250
19) 浜田善利：『耳嚢』に記録された民間療法，日本医史学雑誌 39 (2)，179-216，1993

著者への連絡先：佐藤恭道
〒 236-0052　横浜市金沢区富岡西 2-12-19
TEL 045-773-4771